

故 田村雄一博士を悼む

大気電気学者として国の内外に知られていた田村雄一博士は、転移性脳腫瘍のため1981年8月15日に逝去された。誕生日は1904年9月27日であったから、いわゆる喜寿の約1か月前で、残念なことであった。岡山県のお生まれで、旧制第六高等学校を経て、京都大学工学部電気工学科を1928年に卒業された。

卒業論文の題目は「電光と避雷」で、これで将来の道がつけられたようなものであった。卒業後直ちに理学部の地球物理学教室に入って研究に従事された。1930年、長谷川万吉教授がドイツ留学から帰国されてからは、その指導の下に地球電磁気学を専攻されることとなった。1932年から1933年にかけては第2回国際極年観測で、京大では阿蘇火山研究所で地磁気観測を実施することをそのプログラムとしたので、田村氏はその観測と観測結果の解析に協力された。

この後田村氏は長谷川教授が試作したものに改良を加えた回転集電器で、特に雷雲が付近を通る時の記録をとることに専念された。1937年から1940年までは、別府にある京大の火山温泉研究所で同じ観測を続けた。そしてこの2か所における膨大な資料を解析して出来上がったのが、「雷雲内の電気分布について」という46ページの論文で、京大理学部地球物理学教室で発行していた「地球物理」の4巻(1940年)に掲載されたものである。次いでこれの補遺のような形で、「雷雲の電気について」(30ページ)を同誌の7巻(1943年)に発表され、これらによって1945年理学博士の学位を受けられた。

田村博士の研究結果の中で最も注意される点は、雷雲内の電荷分布は、その生涯の中の初期には上負下正の極性であるが、その最盛期には正、負、正となり、老年期には上正、下負となるというように、雷雲の一生の中の時期によって極性が異なることを発見されたことである。

第2次世界大戦後、1955年から1960年にかけての、京都市を中心とした10地点あるいは数地点(お互いに数kmないし10kmの距離をもつ)での回転集電器による夏の雷雲および冬のしぐれ雲の電気の同時観測の実施とその解析も、田村博士の業績として忘れることの出来ないものである。

田村博士の研究方法の特徴は、多くの観測結果を解析

して、その中から普遍的な事実を抽出するという極めて実証的なやり方である。本学会の「気象研究ノート」16巻3号(1966年)には、「雷雲の電氣的構造」を寄稿して貰っているが、それを見ても一端はわかるであろう。

田村博士はまた1954年にアメリカのポーツマスで催された第1回国際大気電気会議、1958年の同じくポーツマスの第2回同会議、1963年スイスのモントルーで開かれた第3回同会議に招待されて出席し、研究発表をされている。1968年には第4回同会議が東京で開かれたが、その時には国内組織委員会委員長として活躍された。

田村博士は1968年定年で京都大学教授を退官されたが、その後直に京都産業大学理学部教授に迎えられ、1980年3月に退職されるまで、さらに12年間学生の教育に尽された。

田村博士は余技として絵や写真にも強い興味を持っておられた。ここには写真に関係したことを、2件紹介しておこう。今から10年以上も前だったと思うが、何かの会合でお会いした機会に、かばんの中からカラーの印画を出して、これは先日東京駅の前で写したものだかといっ、空の雲に出来たいくつもの大きな穴から青空が見える写真を示され、どうしてこんなものが出来るのだろうかと疑問を投げかけられたことがあり、上層でおこっている下降気流について議論したことがあった。同じような、雲に出来た穴の写真が新聞や雑誌の大きな話題になったのは、そのあと間もなくのことであった。

もう1つは、別の時であるが、京都のお宅の付近で夜に写された写真で、樹木などが写っている暗い夜景に、明るい破線状の曲線がウネウネと写っているものであった。後に名古屋でNHKのカメラマンが同じような写真を撮ったが、それについて筆者が調べた結果は本誌15巻2号(1968年)に投稿しておいた。そのことはもちろん田村博士にもお知らせしたのであったが、自分の撮影した場合はちがうと言って、筆者の説明は採用されなかった。

こういうように田村博士は自然界の不思議な現象にも常に心を配られ、それを優れた撮影技術でカメラに収めておくことにも努めておられたのであった。

(島山久尚)